

---

---

Lord of The Ring RPG リプレイ  
『エルフの巫女』

作・ACRAP（全千葉演戯向上会）  
リプレイ清書・海保 研

---

---

## 目次

キャラクター紹介.....	3
本編.....	4
第1章 ゴルブラスと花火師.....	4
第2章 黒の乗り手 ｷﾀ————(°▽°)————ｯ!! .....	6
第3章 ファンゴルンに行くまでにまたｷﾀ————(°▽°)————ｯ!!.....	9
第4章 き～～ろ～～く～～で～～き～～な～～かつ～～た～～ .....	12
第5章 気がついたら骸骨と戦っていて、気がついたら重傷.....	14
第6章 よりによって投げるなよ .....	17
第7章 トンネルの中の怪物 .....	20
第8章 マスターなのかリッチなのか境界不明.....	26
第9章 エステル・シリブレンって発音しにくいなあ .....	34
次回予告.....	37
シナリオ作成メモ.....	38

---

---

## キャラクター紹介

- ◆ ファラシオン  
エルフの魔術師。とりあえずこの第2部までのリーダーであり主人公格だったが主人公は卒業。でも話をちゃんと進めてくれるからまだこの位置
- ◆ フドーリン  
ビョルン族の野伏。野伏らしい事を未だに何一つしていない。(前回と同じ)
- ◆ バッカニア  
南寇(バイキングもどき)の戦士。影薄くなっちゃった。頑張ってるのに
- ◆ ゴルブラス=ブレッカー=バギンズ  
ホビットの吟遊詩人。だから何？俺のロールプレイにはそんなの関係ねえ！って感じ
- ◆ ジョンドレド  
病欠
- ◆ アリオン(NPC)  
男ばかりでムサイから用意したエルフの忍びの女の子。恋愛フラグも死亡フラグも立たない。と書いたが今回で死亡フラグ立った。ていうか・・・
- ◆ ガンダルフ(NPC)  
あーあ、出しちゃった。

---

---

## 本編

### 第1章 ゴルブラスと花火師

マスター「前は君たちは黒い剣を追ってエメラルドの砦に行き、黒い剣は何とか奪還したものの、エメラルドの砦は崩壊。フドーリンは熊になった。もう少しゴルブラス向けに説明するか？」

ゴルブラス「いや、皆まで言うな、もう全てよし。あいわかった。(笑)」

バックニア「悪い魔法使いはやっつけたと。アマーギン。」

ファラシオン「そうそう。」

マスター「現在は爆発してしまったエメラルドの砦の跡地にファラシオン、バックニア、フドーリンの3人がいる事にしよう (忘れてたけどアリオンも)」

バックニア「とりあえず、戻るしかないよな」

フドーリン「どこへ？」

ファラシオン「ガラドリエル様の元へ。」

フドーリン「じゃあ俺葉っぱ一枚拾って身につけるよ(笑)<sup>1</sup>」

マスター「まあ誰にも会わないからいいけどね。とりあえず君らは霧降り山脈から下山して北東に向かうことになった。1日の行程で下山してロリエンへ。馬もなく徒歩で向かっているんだが、2日目の昼間。知覚ロールをしてください。」

皆して、マトモな目が出ていない。仕方ないのでアリオンが成功した事にする

アリオン「みんな隠れて！」

フドーリン「隠せ!(笑)」

マスター「違——う！とりあえず<隠れ>ロールをしてくれ」

ファラシオン「フドーリンだけ<隠せ>ロール(笑)」

隠れロールを行うが・・・バックニアは100越えの成果を出す。これが幸いした。

フドーリン「ギリギリ隠れたかな。あそこしか出てない(笑)」

マスター「はいはい落ち着いて (特にゴルブラスのプレイヤー)。東の空から黒い鳥の大群が向かってきた。」

バックニア「なんだあの黒いのは!？」

ファラシオン「サウロンの手のものか!<sup>2</sup>」

マスター「幸いにも・・・バックニアは隠れるのに成功してたので鳥はそのまま行ってしまった。」

フドーリン「俺らは？」

マスター「見つかったけど・・・只の裸のおっさんとエルフだからな。」

フドーリン「サウロンに俺が裸だとバレた!(笑)」

マスター「(ウズウズしてるから) さて、[ゴルブラスのプレイヤー]の方に行くか。名前なんだけ？」

バックニア「バギンズ？」

ファラシオン「バギンズじゃねーよ」

---

<sup>1</sup> しばらくこの全裸ネタで引きずる。というより前回からこればっかやな。

<sup>2</sup> 本当はこうは言っていないのだが、話を繋げるためにこう言っていた事にする。なんか今回聞き取りづらい。

---

ゴルブラス「ゴルブラス・ブレッカー・バギンズ！＜移動と運動＞の[板]が-110のゴルブラスだ！<sup>3]</sup>  
ファラシオン「俺だって-85だから」  
マスター「えっと・・・まずそれを先に解決しないと。何で旅に出たの？」  
ゴルブラス「ホビット庄が破壊されたから(笑)」  
マスター「まだ破壊していない。してねーよ！」  
ゴルブラス「破壊されそうな気がしたから、逃げてきたんだ。」  
マスター「・・・ファラシオン、フォロー頼む。」  
ファラシオン「自分の村で盗みを働いて、追い出されたんだよ」  
ゴルブラス「なんだよ、悪者かい。早くも(笑)」  
ファラシオン「じゃあ、村で大失敗をやらかして、逃げ出してきたんだよ」  
ゴルブラス「結局悪者かい！」  
ファラシオン「大事な祭りの日に、花火を大爆発させてそれで逃げてきたんだよ(笑)<sup>4]</sup>  
マスター「それぞれ。それでいい。」  
ゴルブラス「建前上は、見聞を広げるため」  
マスター「それでもいいけど。君はどうやって越えたかはわからないんだけど、霧降山脈を越えてー」  
ファラシオン「何と！すごい！」  
マスター「俺もおかしいなと思ってはいるんだけど、ロリエンの北あたりで一人の負傷した老人と遭遇する。体中に酷い火傷を負っているが生きているようだ」  
ゴルブラス「お、俺の花火がこんなところに、ごめんよおじいちゃん！(笑)僕のせいじゃないから。」  
マスター「まだ、意識はないよ」  
ゴルブラス「じいちゃん起きろ！じいちゃん！」  
マスター「そうすると、君が老人の顔を見ると・・・ホビット庄に来て花火を披露してくれる老人だ」  
ファラシオン「ま、まさか・・・(タメ)・・・花火師！？(笑)」  
ゴルブラス「こいつのせいで俺は里を追い出されたに違いない！(笑)」  
マスター「まあ、そういうカラミではあるんだけど・・・」  
ファラシオン「お前何かできないのか？」  
マスター「応急手当くらいならできるよ。」  
ゴルブラス「じゃあするよ。」  
マスター「すると、手当てをして半日程様子をみると、老人が目覚めてー」  
老人「おや、こんなところでバギンズの四男坊に会うとは。<sup>5]</sup>  
ゴルブラス「四男坊！？」  
ファラシオン「名前変えよか、ヨナンボーに。ヨナンボー・バギンズ(笑)」  
老人「つくづくわしはホビットに守られているらしいのう。」  
ファラシオン「ガンダルフこんなところでどうしたの？」  
ゴルブラス「何で火傷してんのおじいちゃん！？」  
ガンダルフ「炎の悪魔と戦って火傷したのじゃ。」

---

<sup>3]</sup>板金鎧を着用した時の運動能力のスキル。规则的に修正が激しいため、未訓練のキャラは能力値がある程度あっても大体こうなる。

<sup>4]</sup>『ロードオブザリング第1部 旅の仲間』より。本来はメリーとピピンだがまあいたずら好きのホビットの事だし。ガンダルフがあんな村で花火を見せるのも初めてではないし・・・

<sup>5]</sup>バギンズはフロドの苗字でもある。ここでこんなキャラを出したら設定壊れる心配もあった。しかし元々ホビットは親戚筋の非常に多い種族なのでフロドの遠縁くらいでこじつけられると思った。まあ、そういう心配するならガンダルフを出すなという自分ツッコミ

ゴルブラス「え！？もうそんな所まで話進んでるの？」  
ファラシオン「お前のいない間にね」  
マスター「今回で3回目だから映画だと2作目の冒頭なんだよ」  
ガンダルフ「で、これはお主が手当てしてくれたのか？」  
ゴルブラス「そうだよ。」  
ガンダルフ「それはすまなんだ・・・ってガンダルフこんな言い方しないよな(笑)。そうそう、ワシは行かなければならないところがある」  
マスター「と言ってガンダルフ歩き始めたけど、ついていく？」  
ゴルブラス「うん。」  
マスター「そうすると、しばらく歩いていると南の方で爆発らしき音がした。ガンダルフはそっちの方を見ている」  
ガンダルフ「ぬうう、こりゃいかん。」  
ゴルブラス「ひょっとしてその爆発に行こうとしている？」  
ガンダルフ「もちろんじゃ、あの爆発には不吉な匂いがする。」  
ゴルブラス「触らぬ神にたたりなし。もうちょっと遊んでいこうぜ。」  
ガンダルフ「ホビット族は体は小さいが勇氣溢れる種族だと思ったが、違ったかの？ゴルブラス君？」  
ゴルブラス「すげえムカツく(笑)こんなガンダルフ初めて見た？(笑)」  
マスター「俺も微妙だなと思いつつながらロールプレイしているんだけどね」  
ゴルブラス「行ってやるさ。ああ、行ってやるさ」  
マスター「でもきっとガンダルフ、ニッコリ笑ってるから。いい顔で。」  
ガンダルフ「急いだ方がいい。」  
マスター「と言ってガンダルフは馬を呼び寄せた。ガンダルフの後に乗って南に向かったよ。」

## 第2章 黒の乗り手 柶————(°▽°)————ツ!!

マスター「では、3人の方に戻るよ。ところが一日目は闇の鳥に見つからずに済んだんだけど、ひっきりなしに来るので見つかったかもしれない。」  
フドーリン「見つかったかもしれない！と思っている」  
マスター「とはいえど、寄り道をするわけにはいかずロリエンに進んでいるんだけど」  
バックニア「早いとこロリエンに戻ろうぜ。この剣背負っていると背中がムズムズするんだよ」  
マスター「さて、夜なんだが見えるファラシオンとアリオン、知覚ロールをしてくれ。」

知覚ロールを行う。ファラシオンが見えたことにする

ファラシオン「見えた。見えるぞ！」  
マスター「夕方くらいなんだが、南の方から黒い衣を纏った人影が・・・」  
ファラシオン「後から着いてきているってことか。一騎？」  
マスター「一騎」  
ファラシオン「近くに隠れる所はない？」  
マスター「まだ、ないよ。」  
ファラシオン「まだない？みんな俺の周りに集まれ！覚えたばかりの呪文をかけるから！『霞隠れ！』」  
目標の30センチ以内にある—あぁっ！(笑)」  
バックニア「30センチ以内に密集するんだ！」  
マスター「30センチじゃあねえ・・・」  
ファラシオン「やっぱりみんな集まるな！(笑)」

---

バックニア「なんだよ、集まれと言ったり集まるなど言ったり！」  
ファラシオン「後から何か近づいてきている」  
バックニア「なに、何かって何だよ!？」  
ファラシオン「何か、馬に乗った影。しょうがない、隠れられる?どこかに？」  
マスター「もう少し行けば小高い丘が見える」  
ファラシオン「まだ馬とは離れている？」  
マスター「馬に乗っていないよ。どっちも。君らもナズグルも—あぁっ!(笑)」  
ファラシオン「ナズグル?じゃあ逃げよう(笑)あの丘に向かって逃げよう。」  
マスター「ナズグルも—いやもと何か黒い不吉な人影も—」  
フドーリン「ナズグルみたいに不吉だ」  
マスター「辺りを探りながら、こっちに向かってきている。」  
ファラシオン「マジでやばい。あれは逃げよう。」  
マスター「逃げて逃げて追ってくるよ。」  
バックニア「いいから早くロリエンに行こう。」  
ファラシオン「全速力で行こう。それしかない。」  
マスター「ナズグルも追ってくるよ。ところで寝る?寝ない？」  
ファラシオン「寝ないよ。怖いもの。」  
フドーリン「奴は昼間でも活動できるの」  
マスター「できるよ。じゃあ徹夜で走ったから12点のダメージを負ってくれ」  
ファラシオン「あと2日も走ると死んでしまう。」

マスター「で、2日も全速力で走るとナズグルの姿は見えなくなった。ロリエンまであと3日程度の所に来た。」

フドーリン「野営しようぜ」  
ファラシオン「野営しようか。」  
マスター「で、体力は回復して—ダメ。見張りは？」  
ファラシオン「ジョンドレド(笑)。本当にいないの？」  
マスター「いないよ。前回で分かれたきり合流していないもの。」  
ファラシオン「とりあえず見張りたてようぜ。とりあえず一番歳の若い奴から起きてろ。俺594歳(笑)」  
フドーリン「24歳」  
バックニア「15歳」  
ファラシオン「お前だよ(笑)若い者は元気だなあ(笑)」  
バックニア「エルフと人間から一人ずつってことにしないか？」  
ファラシオン「無駄な事を」  
フドーリン「貧弱な奴らは寝るが良い。俺が起きてる」  
ファラシオン「寝る。おやすみフドーリン」  
マスター「じゃあフドーリン知覚ロールして。」

フドーリンの知覚ロールは成功したが、それによって非常に危機的な状況に気づく

マスター「囲まれてる」  
ファラシオン「俺は寝ている。」  
フドーリン「とりあえず皆を叩き起こすよ」  
バックニア「ぐわあ」  
ファラシオン「何だフドーリンやめろ、金槌で殴るのはやめてくれ(笑)どうしたフドーリン？」  
フドーリン「囲まれてる」

---

---

ファラシオン「何者かわからんのか？エルフスコープで見てみる。説明しよう！エルフスコープとは—  
(笑)」

マスター「亡霊。生きている者に害を為す怨念の塊が君らを囲んでいる。」

ファラシオン「こりゃ亡霊だなあ」

マスター「その数、約 20」

ファラシオン「手に負えん。亡霊が 20 匹・・・」

バックニア「さて、どうしたものだろう？」

マスター「そして、最も禍々しい気配が馬で近づいている。」

バックニア「ついに来たか、あの黒いのが」

ファラシオン「キ————(∇)————ッ!!」

フドーリン「かなり、ヤバいかもね。」

ファラシオン「軽くヤバい(笑)ナズグルだ」

マスター「というわけで、君らピンチ。」

フドーリン「たああすけてくれえええ (ルパン調)」

ゴルブラス「こりゃ俺が合流する前に全滅か？」

バックニア「その可能性は高い」

遂に姿を現したナズグル。その姿を見たものは自動的に抵抗ロールを行う事になる。失敗すると恐怖してしまう。

マスター「神霊抵抗ロールを行ってください」

相手が強すぎたため、ロールには軒並み失敗すると思われる。しかし、ファラシオンだけが成功した。

マスター「フドーリンとバックニアは恐怖に駆られて—」

バックニア「ががぐブルブル」

フドーリン「じょ~~~~~って漏らしちゃう(笑)」

マスター「ファラシオンだけが必死に頑張っているけどね。」

ファラシオン「何しようかな・・・(というより何ができるかな。)『隠れ』の呪文を使う」

一応ロールには成功し、隠れることができた。

マスター「そいつは、ゆっくりバックニアの方に向かってくる」

バックニア「わああ、こっち来んなよ！剣を抜こうとしよう、ブルルルル」

フドーリン「攻撃してみよう。うらあ～～<sup>6</sup>」

無限ロールに成功はするが、大方の予想通り、

マスター「痛打を与えたはずだが何事もなく、今度はフドーリンの方を向いた。心霊抵抗を行ってくれ。15 レベル」

フドーリン「やっちまった俺～(笑)」

心霊抵抗を行い、今度は失敗する

マスター「恐怖に怯えて何もできなくなる。更にカチ割り丸が崩れ去る可能性がある。」

しかし、ロールの結果崩れ去る事はなかった。

---

<sup>6</sup> よく考えたら、恐怖に震えているから攻撃できるはずがなかった。



---

フドーリン「カチ割り丸がああああ！ヒィヒィ！ががががががが」

マスター「では、今度はナズグルがその骨ばった手でフドーリンの体に触れる。すると、ナズグルが触れた手からゆっくりと冷えていく。」

これに対しても神霊抵抗を行う、これに成功した。

フドーリン「こりゃ、相当ヤバイな・・・波紋の呼吸で何とか(笑)」

マスター「で、今度はバッカニアの方に触れようとする」

バッカニアはかろうじて抵抗に成功する。が、しかし、ピンチは変わらない

マスター「(じゃあ、そろそろ行くか) あわやというところ！ファラシオンは隠れているからいいけどこの二人は恐怖に震えてもうどうにもならないところ。舞台はゴルブラスへ」

マスター「ゴルブラスはガンダルフと一緒に走っているのだが、ガンダルフは空の一方を見ながら急いでいる」

ゴルブラス「そっちに何があるの？」

マスター「野営地で、怨霊とかナズグルがいてー」

ゴルブラス「今すぐ引き返そうぜ！(笑)」

ガンダルフ「今こそお主の出番じゃ」

マスター「ガンダルフは懐からルーン文字が刻まれた石を取り出すと、君に預けた。」

ゴルブラス「この石は何でござりまするか？」

ガンダルフ「ワシが合図したら、この石を投げるのじゃ。簡単な仕事じゃろ？」

マスター「と言って、君を隠れさせると、ガンダルフはナズグルの方に向かって言った。ナズグルがそちらを見ようとしたところでー」

ガンダルフ「今じゃ！！」

ゴルブラス「俺は抵抗ロールはー」

ファラシオン「いいからとっとと投げろ！」

マスター「その石を投げると、まばゆい光を放ち、亡霊は消え去りナズグルは馬に乗って帰っていった。」

### 第3章 ファンゴルンに行くまでにまた柁————(°▽°)————ツ!!

バッカニア「たすかったあ～」

ゴルブラス「俺の力に恐れを為したか、ナズグルめ(笑)」

ファラシオン「姿を現す。貴方はもしやミスランディアでは？このような所でお目にかかれるとは、光栄です。」

ゴルブラス「なんのなんの(笑)」

バッカニア「お前が言うな！こいつは？」

ゴルブラス「ヨナンボー(笑)」

ファラシオン「どちらにしろ、助けられた事には変わらない。礼を言う」

ゴルブラス「いやいや、礼には及ばん(笑)」

ガンダルフ「いやいや、お主らこそ、随分苦難の旅を歩んできたようじゃのう。ファラシオン」

ファラシオン「知っておられるのか！」

ガンダルフ「うむ」

ゴルブラス「伊達に花火師じゃないな(笑)」

---

ガンダルフ「しかし、ナズグルに気づかれた以上、最早安全とは言えん。向かわなければいけないところがある」

ゴルブラス「俺はなんで?(笑)」

バックニア「巻き込まれたんだよ」

ガンダルフ「残念ながら、ロリエンも安全とは言えん」

バックニア「では、どこに行けば?」

ガンダルフ「ファンゴルンに向かうのじゃ。」

ファラシオン「あの古の森へ?ファンゴルンで何をすればいいのです?」

ガンダルフ「まあ、その話は後じゃ。今日とはとにかく休むが良い。寝ずの旅で疲れておるのじゃろう?」

ファラシオン「賛成!その通りなんです。寝てないんです!(笑)」

ガンダルフ「ゴルブラス、お主も重要な役目を果たしてくれた。お主の好きなパイプもあるぞ」

さて、ナズグルをからくも撃退した一行は一晩の休息を取る。

マスター「翌朝。休息に専念し、薬草なども使ってくれたおかげで受けている打撃は回復したよ」

ガンダルフ「さて、バックニア、その剣を見せておくれ」

バックニア「見せるよ」

ガンダルフ「……………(一分)……………なるほど、お主らはやはりファンゴルンへ向かわなければならぬ。わしには用事があって行けないのだが」

バックニア「一緒に行ってくれないんですか?」

ファラシオン「ガンダルフらしい…………」

ガンダルフ「このゴルブラスを連れて行くが良い。なりは小さいが役に立つ。」

ゴルブラス「わかった?。でも何でそこに行かなきゃいけないの?」

ガンダルフ「それは行けばわかる」

ファラシオン「いけばわかるう?」

ガンダルフ「ファンゴルンで、森の守護者に『レンメナルド』へ案内をして欲しいと頼めばよい。」

ファラシオン「その森の守護者にはどうしたら会えるんですか?」

ガンダルフ「それも、行けば会えるであろう。さて、お主らには馬が来たぞ」

マスター「そして、ガンダルフはどこからか遠くから馬を呼び寄せた」

ゴルブラス「じいちゃん、その前にあの石頂戴。」

ガンダルフ「あ?あの石?もう切れた」

ゴルブラス「また亡霊が出たら困るじゃないか。」

ガンダルフ「大丈夫じゃ。この馬はメアラスという優秀な馬での。ナズグルには追いつけんわ」

ファラシオン「私はこの白馬をもらう」

マスター「勝手に決めやがった(笑)」

ゴルブラス「じゃあ俺この赤いの」

フドーリン「じゃあ俺はこの黒いので(笑)」

ガンダルフ「そうそう、もう一つじゃ。レンメナルドに入る事で、その黒い剣と対となる宝が手に入るはずじゃ。それがあればもうナズグルに追われることはなからう。」

バックニア「それは剣?」

ガンダルフ「それは己の目で確かめるがよい。では、さらばじゃ!」

マスター「というとガンダルフは凄腕で馬に乗って走っていった。」

ファラシオン「は〜、じゃあ引き返すことになるのか。逆へ向かわないとな」

---

7 バックニアと同レベル以上にロールプレイしてくれやしねえ。この台詞はしかたないので後からつけたもの。

---

バッカニア「うむ」

ファラシオン「しかし今回はメアラスがある！一日で着けるに違いない。」

マスター「それは無理だ。4日かかる。」

ファラシオン「わかった。では突然入ってきたホビットを快く迎えてから、ファンゴルンに向かうよ」

ゴルブラス「迎えてくれなきゃ困っちゃう(笑)」

マスター「では4日間、ファンゴルンに向かうよ」

バッカニア「また、変なのが追っかけてくれる前にさっさと行っちゃおうぜ」

さて、ファンゴルンまでの4日間の旅の途上

マスター「幸い、黒の乗り手に対してもメアラスも気づいたので逃れる事ができた。」

フドーリン「服を買いたい(笑)」

マスター「そうするとだ。今アドリブで追加するんだが、村が見えてきた。以前オークに襲われたメル村。」

ファラシオン「あれはメル村じゃないのか？丁度いいフドーリン、あそこで服をもらってこい。」

ゴルブラス「それは人間の村？」

ファラシオン「人間の村。俺たちに恩義のある村」

ゴルブラス「凄い恩着せがましい言い方だな(笑)」

ファラシオン「あの盗賊は粉々にされたかな」

村長「これは久しぶりでございます。前の件についてはどうもありがとうございます」

ファラシオン「いやいや、礼には及ばんよ」

村長「で、フドーリンさま・・・一体、そのなりはー」

ファラシオン「決してこれは趣味でやっているんじゃない！やんごとなき理由でな！(笑)」

村長「もしできれば服をお渡ししますが」

バッカニア「いやいや、それには及びますまい！(笑)」

フドーリン「もうええわ！服をくれ〜」

村長「今日は時間も遅いですから、泊まっていから、られ・・・られよ？」

ファラシオン「いかれらっちゃらりら(笑)」

ゴルブラス「お前らおかしいぞ」

フドーリン「お言葉に甘えて」

マスター「とりあえずフドーリン、服はOKです。」

フドーリン「本当は鎧がいいんだけどな・・・」

マスター「それは無理。勘弁してくれ」

ファラシオン「時に、あの後盗賊が一人帰ってきたはずなんだがー」

村長「そんなの、みんなでタコ殴りにしてやりましたよ(笑)これからどちらへ向かわれるんですか？」

ファラシオン「南の方へ。エントに会いに行く」

村長「そうですか。それは、旅の無事をお祈りしております。」

ファラシオン「うむ。最近どうだ？村の周りで変わった事とかはないか？」

村長「前にもましてオークが増えてきました。一体に何か起きてるんですかねえ？南の方で」

ファラシオン「オーク祭りだ(笑)」

村長「オーク祭り！？」

ファラシオン「夏だからなあ」

村長「夏！？(笑)」

マスター「というわけで、皆は村で歓待されていたんだが、夜になるとメアラスが騒ぎ出した。」

---

---

全員「キタ————(°▽°)————ツ<sup>8</sup>」

ゴルブラス「出発あつ！」

バックニア「ここにいるとまた面倒な事になるから早くいかないと」

ファラシオン「仕方あるまい。村長、出かけねばらなくなった」

村長「ええっ！？まだ夜ですよ。明日までゆっくりしていればよろしいのに。」

ファラシオン「いや、悪しき者が追ってきている。我々がここにいればこの村も危ない」ここを出ねば。」

村長「ヒィィィ！」

ファラシオン「気持ちだけ受け取ろう。」

マスター「ということで、村長は慌てて食料や包帯、止血帯を用意してくれた。」

ファラシオン「ありがとうございます。ではこの笛をあげよう。もし、この村がオークに襲われたらこの笛を吹くんだ。」

マスター「(何だその設定)で、この笛は何なの？」

ファラシオン「さっき作った。音が出るかはわからない(笑)しかも、吹いたらどうなるか言っていないからね。(笑)」

マスター「でも、オークに襲われてこの笛を必死になって吹いている姿が想像できるんだけど(笑)」

ファラシオン「その時に俺らは帰って来るんだよ」

マスター「あと、コート、マントに、灯油3つ、ランタンがいるでしょう。ということで用意してくれた。」

ファラシオン「誰が持つ？」

フドーリン「ホビットが。」

マスター「规则的には一番持てないんだけど。笑」

フドーリン「確かに规则的には俺が一番持てるんだけど、俺は素っ裸に斧って言うのが・・・」

マスター「頼むからちゃんと服をもらってるからな！ここから先はお前の趣味だからな！(笑)」

フドーリン「仕方ない、じゃあそのランタンと油3つは俺が持っていく」

マスター「ああ、そうあとロープも渡された。」

ファラシオン「では心苦しいが、夜中出発！」

## 第4章 き～～ろ～～く～～で～～き～～な～～かつ～～た～～

マスター「出発した。黒の乗り手も振り切って、ファンゴルンの入り口に着いた。」

バックニア「昼？夜？」

マスター「まあ、昼にしよう」

バックニア「たのも～」

ゴルブラス「エントは、どこじゃ？」

ファラシオン「森の守護者よ！と叫んでみる」

マスター「まだ入り口だからな」

バックニア「じゃあもっと奥まで行こう」

マスター「奥に進んでいくと、少しずつ空気が濃密になっていく」

ファラシオン「ちょっと過呼吸気味だから、ハッハッハッハッハッ(笑)」

マスター「しかも、何かに見つめられている気がするのだが」

ファラシオン「じゃ、俺キョドってる」

---

<sup>8</sup> こう表現するしかあるまい。



一行は森の髭の案内でレンメナルドに入ることになる。(次ページ地図 図 1 レンメナルド浅層)

## 地下遺跡浅層

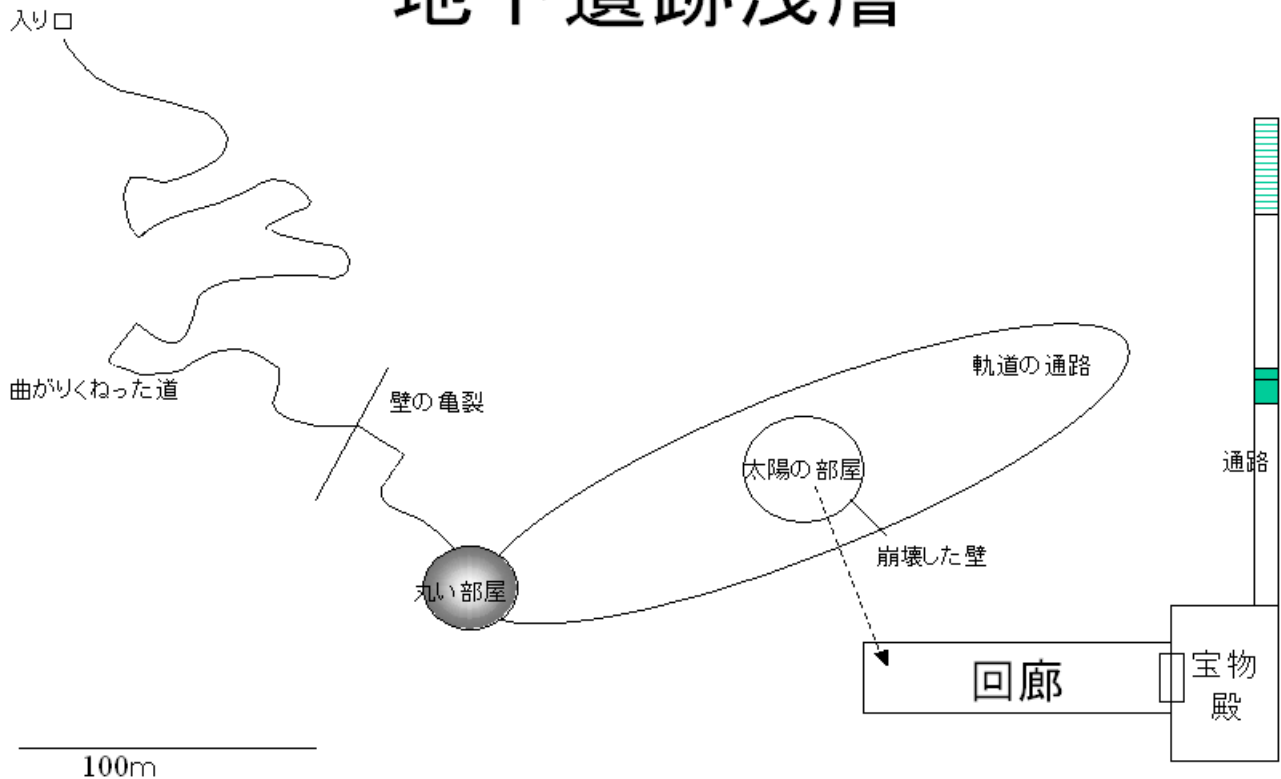


図 1 レンメナルド浅層

一行は曲がりくねった道を 800 メートル程下る。しかし、途中で壁に亀裂があるのを見かける。亀裂はかなり大きく、地下の生物の進入形跡もあった。

やがて丸い部屋に到着する。ここには「希望の地レンメナルド」との看板があり、宝物殿までの地図もあった。そして、丸い部屋の両端から細い通路が丁度楕円形を描くように延びている。ここも途中で壁が崩壊しており、太陽の部屋と名づけられた部屋に入る。

太陽の部屋には壊れた石像があった。何者かがどのように壊したかは不明である。太陽の部屋には下へ続く梯子があり、これを使って一行は下の回廊へ到着する

回廊では西から東へ柱が立ち並び、東の壁には大きな扉のある部屋である。しかし、浮かれて進むゴルブラスの前に、柱の影から動く骸骨が 5 体現れる。骸骨はその目的、正体も明らかにしないまま、浮き足立ったゴルブラスに襲ってきた。そして、ゴルブラスは重傷を負ってしまうのであった。

### 第5章 気がついたら骸骨と戦っていて、気がついたら重傷

ゴルブラス「見知らぬ骸骨達との戦いを始めたゴルブラス一行！(笑)」

攻撃を受けて、麻痺してしまったゴルブラスに容赦なく 3 体の骸骨が襲い掛かってくる

---

フドーリン「骸骨に攻撃するよ」

フドーリンの攻撃は骸骨に対してダメージを与えることに成功するが、痛打としては相手が骸骨のため、麻痺や（出血による）毎ラウンド打撃はない

マスター「じゃあ骸骨がフドーリンに反撃するよ」

しかし、この攻撃は外してしまった。更に続けて骸骨がバックニアに攻撃するがミスリルの鎧によって外す。

ファラシオン「さっき用意した『光弾』を撃つよ」

マスター「まあ、ギリギリ届いた事にしていいいか。どうぞ」

この光弾によって8点のダメージを与えて、痛打

マスター「中程度の帯電。打撃+6、行動力-5。以上。次は？」

ゴルブラス「剣で切る！」

バックニア「お前下がれよ！本当に死ぬぞお前！」

ゴルブラス「しょうがないなあ。じゃあ下がって弓に持ち替えよう」

マスター「言っておくけど、君は重症を負い、出血もしているんだからな」

バックニア「ランタンも持っているんだからな」

マスター「バックニアの行動は？」

バックニア「じゃあ俺は自分に攻撃してきた奴を攻撃。死にさらせい！」

ダイスの目が振るわなかったが痛打の運が良かった。

マスター「『武器を持った腕の腱を切り裂く、腕が使えなくなる』なんだけど、骸骨に腱はないから、ナシってことで」

フドーリン「じゃあどうやって腱もないのにどうやって腕を動かすんだよ〜(笑)」

マスター「むかつく〜、魔法ですから。」

次のラウンドのイニシアチブ。戦士二人組の出目が低いのに加えてゴルブラスも低い。唯一ファラシオンだけが高いイニシアチブを持つ。

ファラシオン「トップ？トップだけど呪文準備(笑)」

この後骸骨群が連続で行動する。バックニアへの攻撃を行い（外れ）、ゴルブラスを追い、フドーリンへの攻撃が行われるが、大したダメージを与えることはできなかった。続いてゴルブラスだが・・・

ゴルブラス「俺、弓撃つ！」

マスター「いいけど、弓を撃つのにつがえがいるからね。おまけに弓は両手ふさがるんだけどいいの？ランタン持っているんでしょ？」

ゴルブラス「パース！！(笑)」

バックニア「お前アリオンの傍にいて介抱してもらえ」

ゴルブラス「じゃあ、ランタンは下に置いて弓をつがえよう」

続いて、バックニアの攻撃だが軽傷で終わる。しかし、フドーリンが自分に攻撃してきた骸骨を一撃で屠る。

マスター「あと一匹骸骨が残っているね。ファラシオンを追っかけていったことにしよう。これで終わり」

---

ファラシオン「なにい!？」

更にラウンドは進む。バックニアは骸骨とまだ交戦状態にあるため、骸骨はバックニアを攻撃するがかすり傷で済む。

ファラシオン「じゃあ、目の前に迫ってきた骸骨に『水弾』<sup>18</sup>を撃つよ。どりゃあ。」

ファラシオンのこの魔法によって高ダメージを与え、しかも痛打は

マスター「あばら骨を軽い骨折(笑)」

ファラシオン「それは、死活問題だよ(笑)」

マスター「まあ、それで落ちた。」

ファラシオン「危ないところだった。」

更に次の骸骨がフドーリンに襲い掛かる。これをフドーリンは軽々と回避し、反撃によって片膝を砕く。これによって骸骨は立てなくなった。

マスター「手で這って攻撃してくることになるけど・・・では、続いて骸骨なんだけどゴルブラスを追った骸骨がゴルブラスに攻撃するんだけど、いい?ていうか戦士二人守ってやれよ(笑)」

フドーリン「だって目の前に攻撃されちゃったからさあ・・・」

しかし、ゴルブラス自身の回避能力は高く、この攻撃はあたらなかった。ゴルブラスは矢を骸骨に撃つが、余裕で外す(ファンブルギリギリ)。このラウンドの最後にバックニアが自身と交戦していた骸骨を倒す。

マスター「残った骸骨はゴルブラスを追っているのと、這っている骸骨のみか・・・イニシアチブどうぞ」

まあ残りが少ないのではしよるが、ゴルブラスを追う骸骨はフドーリンが一撃で吹っ飛ばした。

マスター「これで這っているのが残っているけど、どうする？」

フドーリン「じゃあ、この残っているのはゴルブラスにくれてやろう」

ゴルブラス「俺が心おきなく潰す。この虫けらめえ！」

マスター「体格だけだとお前が虫けらなんだけどな・・・」

バックニア「さて、止血してやるか。」

ゴルブラス「(血が)ダラダラだからね」

マスター「さて、回廊の先には扉があるけど」

ファラシオン「一応、この部屋を全部調べてみよう」

フドーリン「心置きなく調べられるしな」

一行はロールを行う。バックニアが95という高めを出しても何も無い。

バックニア「この部屋は特に何も無いぞ。さっさと行こう」

ゴルブラス「扉は鍵はかかっているな」

マスター「うん」

ゴルブラス「開ける！」

---

<sup>18</sup> まあ、これも名前の通り、水の塊を浴びせる魔法。ただ、炎や雷と異なって特定の痛打を与えるわけではなく砕くのみ。ちなみに、上級の『氷弾』が冷氣によるダメージを与えることができる。



## 第6章 よりによって投げるなよ

マスター「中を見ると、四角の部屋、奥のところに祭壇のような石の台があり、黒く錆びた剣が放置されている」

ゴルブラス「仕方ないなあ～、バシ！（剣を取る）」

マスター「剣を取るが、ボロボロと崩れ去ってしまった。」

ファラシオン「ああ～！お前なんて事すんだ！！貴様！」

ゴルブラス「まあまあ、待てって。そう慌てるな<sup>14</sup>」

フドーリン「三枚に下ろしてやる～」

ファラシオン「バカめえ」

ゴルブラス「こんなんでもって崩れ落ちるようじゃ大した事無いんだって」

ファラシオン「崩れ落ちた剣を手にとりて見る」

マスター「まあ、剣のカスだねえ・・・」

ファラシオン「魔力は感じる」

マスター「いや、感じない。ただし、部屋の一角から魔力を感じる」

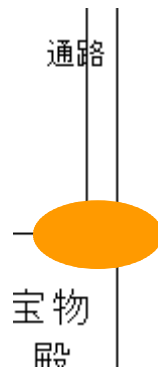


図 2 魔力を感じる・・・

ファラシオン「その辺に放射能反応が・・・」

バックニア「ががががががががががががががががががが・・・(笑)<sup>15</sup>」

ファラシオン「その辺の様子は？」

マスター「まあ、普通にある程度の装飾は為されているが、他の四隅の壁と変わらない」

フドーリン「じゃあ、そこらへん探索してみていい？」

<知覚>によるロールを行う。ファラシオンは大成功をしたが、大成功するまでもなく奇怪な状況になる

マスター「そうすると、その一角だけ、手が壁をすり抜ける」

ファラシオン「おおっと！？（飛びすさる）」

マスター「そうそう、そのリアクション(笑)」

バックニア「ファラシオン、手どうした？」

フドーリン「ファラシオンが壁に飲み込まれていった！？」

ファラシオン「この壁は幻影だ！」

バックニア「生首だあ～！(笑)ということでさくさく進む」

マスター「サクサク進むんだな。通路はずっと続いているけど」

<sup>14</sup> 慌てるなも何ももう遅いんだがな。考えなしな行動が致命的なトラブルになる事を後に体験

<sup>15</sup> ガイガーカウンターのつもり

---

---

バックニア「とりあえず真っ直ぐ進もう。大きさは十分ある？」

マスター「まあ横に二人並べる位には広いよ」

陣形を話し合った結果、負傷しているゴルブラスを下げ、前衛は戦士二人。間にゴルブラス、最後尾にファラシオン、アリオンとする。

さて、早速前衛二人に対し、＜知覚＞ロールをさせる

マスター「5メートル先におかしな感じがする」

ゴルブラス「おかし？おいしいと思うな。行ってみよう(笑)」

ファラシオン「行くんじゃないぞ。」

バックニア「ファラシオン、エルフアイだ！」

ファラシオン「エルフアイ！投射！！(笑)ペカー！」

マスター「そういうんじゃないけどなあ・・・」

ファラシオン「魔力は感じるの？」

マスター「いや、感じない。」

フドーリン「ということは、畏かな。＜畏解除＞ってあったっけ？」

ファラシオン「アリオンは忍びだろ(笑)」

バックニア「アリオンの出動を要請する」

アリオンが畏があるかを調べる。問題なく成功し、前方5メートル先に落とし穴がある事がわかる

バックニア「どこどこどこ、え！？ヒュウカン！(笑)」

ファラシオン「先進もうか」

マスター「ええと・・・それでもいいの？」

バックニア「いやいやいやいや(笑)」

ファラシオン「で、飛び越えられる？」

マスター「幅は2メートル程度。」

フドーリン「じゃあ俺が橋になるわ(笑)」

ゴルブラス「俺飛び越えられないじゃん。」

ファラシオン「じゃあ、フドーリン投げてあげて。」

フドーリン「おう。あ、そーらよ(笑)」

マスター「えーと・・・いいの？(笑)」

ファラシオン「なんか、ちょっとまずいらしい」

マスター「そういう風にホビット扱っていいのかな・・・トールキン怒るぞ(笑)」

ファラシオン「ホビットどう思う？」

ゴルブラス「いやあ・・・全然かまわないよ(笑)」

フドーリン「軽く投げてやるから」

マスター「じゃあ、フドーリン投げるんだよね。落とし穴の向こう側に投げるんだよね(フドー

リン「当然)・・・落とし穴の向こうも落とし穴だったらしく、落ちていった」

念入りに確認したのに・・・単純なトラップに引っかかってしまい、ゴルブラスは二つ目の落とし穴に落ちていった・・・

ゴルブラス「うおおおーっ！あああああえええー、そこには何か見えるのかな？とんがったものとか(笑)」

マスター「とんがってる(笑)」

---

バックニア「いやあ、想定の一」

ファラシオン「想定範囲内だったが、対処できなかった(笑)」

落とし穴は大して深くなく、ファラシオンが寸前で呪文(落下を軽減する魔法)を唱えたため、ダメージは比較的少なくなったが、それも即死でないってだけの話。

マスター「とりあえず、針の無いところに着地しようと思ったけど、失敗した。(痛打ロールを振る)・・・片膝の下に当たって腱が裂ける、武器を持った方の腕に刺さり、骨が折れる・・・(その他もろもろ。殆ど再起不能)」

ゴルブラス「ごめん！」

バックニア「とりあえず遺体の回収を・・・」

マスター「まあ、とりあえず(プレイヤーがかわいそうだから)気絶にして、死ななかつた事にして。大ダメージを受けたということで・・・ファラシオン、何とかする魔法はないのか?(笑)」

ファラシオン「治療をする魔法はないよ」

バックニア「とりあえず、遺体を搬送する魔法を一」

ファラシオン「じゃあ『縄使い』の魔法を使って、ロープでゴルブラスを縛った」

フドーリン「じゃあ俺が引き上げよう」

そして、バタバタと半分無駄な治療活動を行い、何とか生き永らえる事ができた。ここらへんはマスターのサービス。鍛錬の残りが5まで回復させた。本当は「血が止まらない！」とか騒ぎたかったところだが。

バックニア「とりあえず、止血する。出直そう。」

ファラシオン「でも、今ファンゴルの森の中だろ?(無理だよ)」

バックニア「でも、どうしようもないだろ!？」

ファラシオン「どんくらいで死ぬの?」

マスター「まあ、とりあえず治療したし、もう大丈夫(ってことにして)でいいよ。相変わらず、腱とか筋肉とか切れてるけど」

フドーリン「俺が背負ってやる」

バックニア「ここで休むから回復するってことはないの?」

マスター「切れた腱とかはさすがに無理だよ」

ゴルブラス「本来なら長期入院モードでしょ(笑)」

バックニア「ガンダルフに合わせる顔がない(笑)」

マスター「さて、どうするか決めてくれ」

ゴルブラス「じゃあ、俺は背負われたまま、魔法でも使うか。片手で使えるの?」

マスター「(やることなさそうだから)それでもいいけど・・・」

ファラシオン「じゃあ、とりあえずここで休もう」

ゴルブラスには焼け石に水なれど、ここで休むことにした。

マスター「じゃあ、一晩たったことにするけど」

バックニア「じゃあとりあえず、縄で縛って落ちないようにして、壁伝いに落とし穴の横に行くよ」

各自、この方法で<移動と運動>のロールを行い、2重落とし穴を越すことにした。バックニアは何とか渡ることができた。

バックニア「じゃあ、落とし穴の反対側でロープを持っていよう」

フドーリン「最後のフドーリンがどうするかが問題だな(笑)」

バックニアが先に渡れたことで、安全性が高まった。ファラシオンも＜移動と運動＞には失敗したものの、安全に渡ることができた。

バックニア「よし、フドーリン（とゴルブラス）が渡るために、ふんばるぞ！」

フドーリン「ちなみに、俺は体重 150 kg だ！（笑）」

バックニア「ホビット背負ってるしな」

ファラシオン「危険な事はやめよう。『跳躍』の呪文をかけるよ。目標が水平なら 15 メートル飛ぶ事ができる」

フドーリン「よし！ 15 メートル飛んでやれ！ どりやあああああ！」

マスター「15 メートル先に落とし穴があったりしてな(笑)」

フドーリン「みんなと同じところに飛ぶさ」

マスター「飛んだね。はいOK。ちっ、本当はこの先階段だったのに(笑)下りの階段ね。」

バックニア「じゃあ、さっきと陣形は変わらず、降りて行くよ。ホビットはアリオンが背負っていくので」

## 第7章 トンネルの中の怪物

### 地下遺跡深層

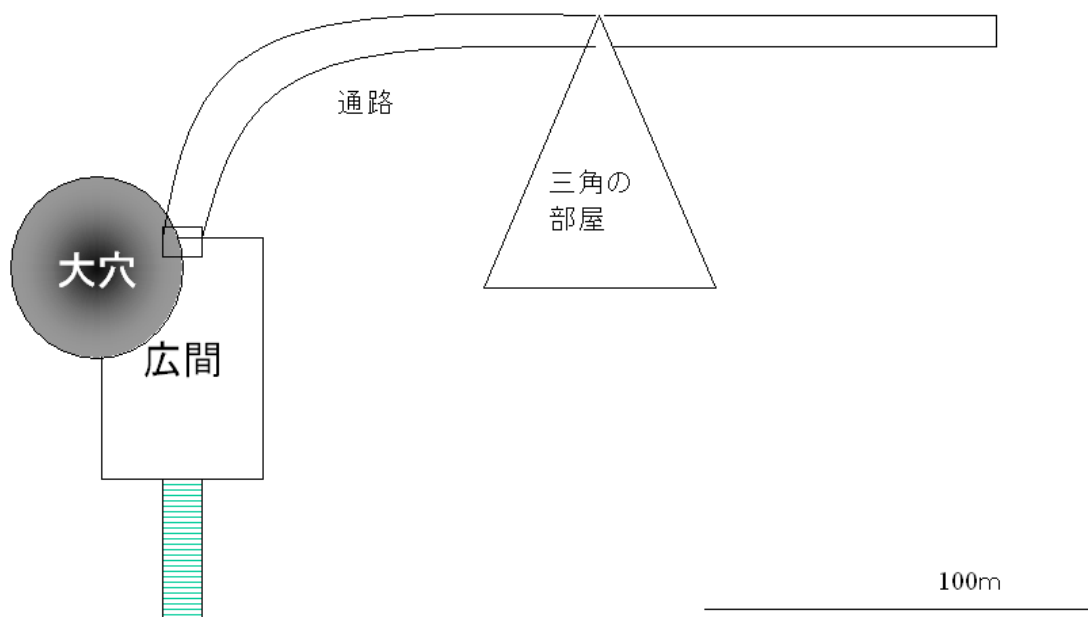


図 3 地下遺跡深層

マスター「階段を下りた先は出口は壊れている。そのまま入る事のできる部屋。大穴が開いているよ」

バックニア「扉は？ どうなってるの？ 吹っ飛んでるの？」

マスター「入ってきた手前の扉は吹っ飛んでる。奥の扉は半分吹っ飛んでる」

フドーリン「穴を覗いてみる」

フドーリン、バックニアの両名は知覚ロールを行う

---

フドーリン「大丈夫大丈夫なんもねえや！」  
バックニア「魔力チェックをしてくれよ」  
マスター「魔力・・・ない。3メートル以内には」  
バックニア「じゃあ、ロープの先に短剣をつけて、たらししてみようぜ」  
マスター「・・・じゃあ、誰がロープを持つ？」  
ファラシオン「俺かな？」  
マスター「いきなり、引っ張られた！」  
バックニア「なにい！？」  
マスター「一発目だから、とりあえず<移動と運動>のロールをしてくれ、失敗すると落ちる」  
フドーリン「釣れたかー？」  
ファラシオン「うわあああああ！助けてくれえ！」

ファラシオンの<移動と運動>ロールの結果、60%の確率で穴から転げ落ちることになる。  
当然ここでファラシオンは失敗。

バックニア「じゃあ、俺は敏捷でそれを止めるよ」  
フドーリン「俺も」  
ゴルブラス「こいつに背負われている俺は、ああああれえええーって(笑)」

慌てて止めに入る二人。バックニアが捕まえて、更にそれをフドーリンが捕まえることになった。

バックニア「穴の中は見えないの？エルフアイで。」  
マスター「ロープと剣に長い毛みたいなものが絡まっている。その奥に赤く大きく光る目と裂けた口が見える。で、どんどん引っ張られているよ」  
ファラシオン「こりゃ、ロープを離すのも手だな。」  
フドーリン「じゃあ、俺はとりあえず引っ張ってみるよ」  
マスター「OK. じゃあ力比べだな。」  
ファラシオン「アリオン！今のうちに攻撃するんだ！下にモンスターがいるう！！」  
アリオン「(攻撃)・・・外しちゃった。」  
ファラシオン「どうやって外すんだよ」  
マスター「だって、目標が見えないからね。チャクラムだし、手応えは感じない」  
ファラシオン「じゃあ、ゴルブラスの弓を借りて攻撃してよ。下の方に撃つからボーナスがつくはずだよ(笑)アリオン早く！！」  
バックニア「アリオン！こっちはもうもたねえ！」

などとやっている間にフドーリンの渾身の力で力比べに勝ち、怪物の方が引っ張り出されてきた。

マスター「向こうが引っ張られてきた」  
ゴルブラス「まさに、今が撃ち所だ！」

アリオンが弓を撃つ！19点のダメージを与え、痛打も与える(ロールしたのはゴルブラス)

マスター「どっかに当たって、力が緩み、相手は手(?)を離した。とりあえず、ファラシオンもろとも穴から脱出した。」  
バックニア「何かいるな。」  
ファラシオン「何かいるな。」  
バックニア「光弾を撃ち込んで覗いてみるってのはどうかな？」

---

マスター「そんな事言っている暇はないよ、下の方からゴゴゴゴゴと音がして這い上がってくるようだ」

ファラシオン「とりあえず逃げろ！」

フドーリン「扉を叩き割るよ」

マスター「扉を叩き割ると、先は結構広めの通路」

バックニア「逃げるよ。」

フドーリン「にーげーろーーー！」

ファラシオン「ズドドドドドドドド」

マスター「戸口から入ってこようとするが、君たちは必死に逃げる。」

バックニア「入ってくるの？」

マスター「怪物は入ってこないけど、その怪物の体毛と思われる毛が君たちを追ってくる」

バックニア「逃げるぜ！」

ファラシオン「フドーリン、あれだよ！油だよ！」

ゴルブラス「で、燃やすってか？」

フドーリン「お前がやれ！」

片手しか使えないゴルブラスが油を撒き、火をつけることにした。敏捷度でロールをした結果。成功した。

マスター「よし、火がついたよ」

フドーリン「燃えろよ、燃えろ！」

マスター「うむ。無事に火がついて、怪物の体毛は驚いて、引いていった。」

バックニア「やれやれだぜ。」

ゴルブラス「一仕事した。」

バックニア「じゃあ通路を奥に進もう」

マスター「奥にはドアがあるよ」

バックニア「罨があるかアリオンに調べてもらうよ。」

アリオン「(ロールをする) ごめん、失敗しちゃった」

ファラシオン「じゃあ、開けてみる」

マスター「開けた開けた。無事に開いたよ。中は三角の部屋」

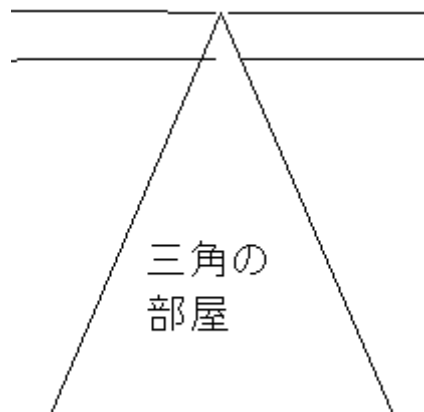


図 4 三角形の部屋

ファラシオン「部屋の様子は？」

---

マスター「まあ、極めて静かだねえ・・・なんだが、短剣がバリ光りだした」

ファラシオン「バリ3だぁーっ！(笑)」

マスター「すると、部屋の空気が中央にニョニョッと集まりだして、歪んで・・・大きな、頭が二つある狼が現れた！」

バックニア「こ、これは!？」

ゴルブラス「大きさは？」

マスター「レベル7くらい」

ファラシオン「つまり、実体化してるってこと？」

マスター「うん、実体化している。完了！」

ファラシオン「呪文準備くらいさせてくれてもいいじゃないか。」

マスター「まあ、チャージ位は許す。」

ファラシオン「みんな、こいつはハリー・ポッターに出てきた奴<sup>16</sup>だ！」

バックニア「扉を開ける。先は」

マスター「そのまま続く通路になっているよ」

バックニア「みんな、こっちに逃げ込め！」

一行は反対側の扉の先に逃げ込む。

マスター「追ってくるよ。」

バックニア「扉閉めるよ。」

マスター「うーん、2,30秒位で壊れそうだけど。ドスン、ドスン、ドスン」

ファラシオン「よし、じゃあみんなで（扉を壊した時に）一斉攻撃だ！」

フドーリン「そうだな。ゴルブラスを降ろすよ。」

ゴルブラス「俺なんかできるのかね？」

まあ、殆ど無理。反対側を警戒する位しかない。

マスター「じゃあ、1、2、3、ダーね。」

ファラシオン「不意打ちになるよね。」

マスター「もちろん」

一行は2頭の獣に一斉攻撃を仕掛ける。まずはファラシオンの『水弾』。

マスター「20点のダメージ。片膝の上に叩きつける。打撃+15、行動力-30、3ラウンド麻痺」  
全員「イェーイ!ヒュー」

続いて、アリオンがチャクラムを撃つ。これもダメージを与え、麻痺の累積もつける。更にフドーリンが攻撃する。ロールはよくなかったが、元が良かったため、ダメージを充分に与え、痛打も致命の一撃となる

マスター「片足への一撃で骨を折る。まだ生きてはいる。」

最後、バックニアの攻撃によって獣は絶命した。

マスター「動けなくなった。ウーウー唸っているけど、何もできない。足とかぼろぼろ」

バックニア「戦いにおいて相手の足を奪うのは常套だからな。ローキック、ローキック！」

マスター「で、この魔物。額に紋章が刻まれているんだけど、ファラシオン、君には見覚えがある。」

---

<sup>16</sup> えっと、『賢者の石』かな。ケルベロスのこと

ファラシオン「むむ!？」  
マスター「アマーギンの紋章である。」  
ファラシオン「師匠の!？」  
マスター「この魔物は、事切れると、その魔物は砂になってしまった。」  
ファラシオン「どうということだ・・・?ここはレンメナルドの下の古代の迷宮・・・ここにアマーギンがいる？」  
マスター「(ヒント) アリオン、しゃべっていい？」  
ファラシオン「喋って。」  
アリオン「わからないけど、来る時にあった亀裂から入ってきたんじゃないの?そうであれば、今までの部屋のいくつかが荒らされているのも説明がつくし。」  
バックニア「あー」  
ファラシオン「すると、アマーギンはここに入ろうとした・・・」  
アリオン「元々、この迷宮だって侵入者のための罠や仕掛けがたくさんあるはずなのに、遭わなかったでしょ。私達。」  
ゴルブラス「遭ったよ(笑)」  
フドーリン「非常にボロボロになったけど。」  
アリオン「アマーギンかもしれないけどー我々より先に悪意を持つ侵入者がいるという事でしょうね。」  
バックニア「アマーギンは死体も見つからなかったし」  
フドーリン「生きている可能性があるという事だな。」  
ファラシオン「この獣を配置しているということはアマーギンは誰かが後から来る事を察知していたということだな。」  
バックニア「ということは、ここから先もアマーギンの罠が仕掛けられているという事だな」  
フドーリン「これからは慎重に進まないとな」  
ゴルブラス「まあ、慎重になるにはやや遅かったけどな(笑)」  
バックニア「じゃあ、先に進もう」  
マスター「行き止まり。壁にシンボルが書かれている。(図 5 謎のシンボル)」

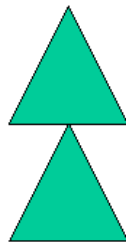


図 5 謎のシンボル

バックニア「これは、ハンペンか?こんにやくか?このシンボルは見たことない?誰も？」  
ファラシオン「それは最近彫られたもの？」  
マスター「ない。いや、元からあったと思われる」  
バックニア「触ってみる」  
マスター「・・・」  
バックニア「剣をかざしてみる」  
マスター「・・・」  
ゴルブラス「この三角の部屋とは関係ないの？」



バッカニア「この部屋からもうひとつ部屋があるとか？調べてみよう。戻ってみる」  
 マスター「どうやって？」  
 バッカニア「三角の部屋に戻って、ここを調べてみる」  
 マスター「ヒュウッ。ここがいきなりガタンと開いて、落ちた。(図 6 うん。こりゃバッカニアも落ちるわ)」  
 バッカニア「落とし穴？そんなのひどいよ!？」

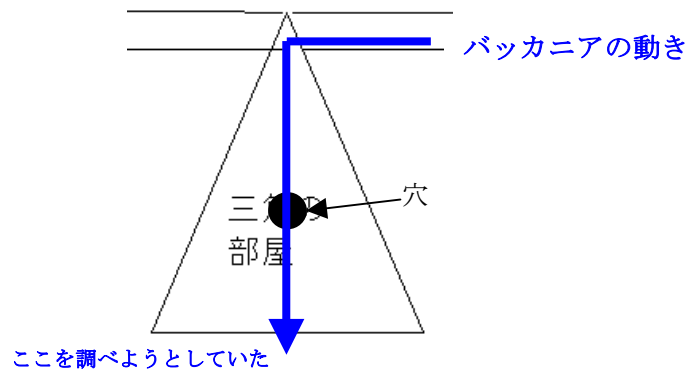


図 6 うん。こりゃバッカニアも落ちるわ

ゴルブラス「大丈夫、下にちょっととんがっているのがあるだけだよ(笑)」  
 マスター「まあ、さっきと違って、横に広いわけではないので、へりにつかまる事ができるよ」  
 バッカニアはロールをしたが、甲斐なく、落ちていった・・・

マスター「落ちた～」  
 ファラシオン「追っかけていく」  
 マスター「今回は底には何も無い」  
 バッカニア「うわあああ、なんだこりゃ～」  
 マスター「下の部屋はこうになっているが、円筒形のかなり大きな部屋 (図 7 まさか、こんなに綺麗に決戦の部屋に行くとはね)」

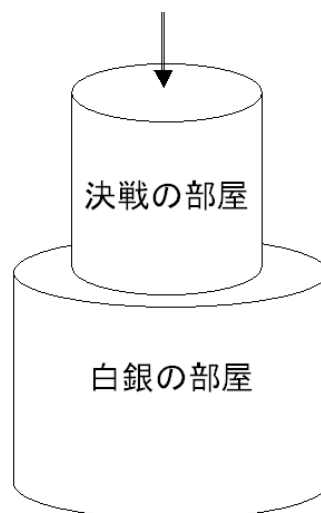


図 7 まさか、こんなに綺麗に決戦の部屋に行くとはね

バッカニア「おおーい、上げてくれえ」  
 ファラシオン「何なんだその部屋は？」

---

??? 「逃れる事はできん」

ファラシオン 「何？」

## 第8章 マスターなのかりッチなのか境界不明

マスター 「という声が聞こえて、後ろを振り向くと、半ば屍肉と化したアマー」

バックニア 「お前は、バラー——ールッ！(笑)」

フドーリン 「バラァァァァァァァァアル！(笑)」

アマーギン 「死ぬがいい」

ファラシオン 「半ば屍肉と化したってことは誰かに死人返しでもされたということか・・・」

ということで、落ちてしまったばかりに厄介な（より厄介になった）相手に遭遇したバックニア

マスター 「ということで、(準備なしに)『氷弾』を撃ってきた」

バックニア 「何で死人の癖に魔法が使えるんだよ！」

マスター 「だって、リッチだもん<sup>17</sup>。」

バックニア 「リッチい！？！？！？言っておくけど、俺はミスリル銀でカバーしているから魔法は利かないよ。」

いや、利くことは利くんだが・・・この一撃により9点のダメージ。さすがミスリル銀。

バックニア 「ぐはあ！やられた～」

先制攻撃の後、アマーギンとバックニアの戦闘が始まる。(ちなみに暇なゴルブラスはアリオンを操作)バックニアの反撃はほぼ必殺の致命の一撃だが、打撃を与えたが死人なので麻痺や行動力の低下を与えることはできなかった。まあ、当然。しかも、ナズグルと同じように多少強い程度の魔法の武器では・・・(ロール)

マスター 「その魔法の剣は光を失った。ボーナス無くなった。普通の剣」

バックニア 「あひやあああああ」

マスター 「さて、アマーギンが手を振ると、小さい怨霊が10匹程現れた。」

ファラシオン 「(ゴルブラス) 石投げろ石！」

ゴルブラス 「そんなのもらってたっけ？」

バックニア 「圧倒的にこっちが不利！黒い剣よ、オラに力を貸してくれ！」

さて、次から上にいるキャラクターも含めて戦闘を行っていく。

ファラシオン 「アマーギンに光弾を撃つ！いってくれ！どりやああああ」

フドーリン 「なんか、アンデッド系に良く利きそう。<sup>18</sup>」

---

<sup>17</sup> リッチ。強力な魔法使いが死してなお蘇り邪悪を為す物。言うなよ。俺だって強すぎるんじゃないかって後悔しながら進めているんだから。



<sup>18</sup> すまん。そんなルールはない

---

マスター「14点のダメージを与えた。死人だから出血などはしないけどね。」

ファラシオン「2」

マスター「は？」

ファラシオン「2。」

マスター「・・・髪の毛が逆立つ(笑)」

ファラシオン「見たか！アマーギン！」

アマーギン「そうか、ファラシオン。お前も生きていたか・・・」

ファラシオン「往生際が悪い！」

続いてフドーリンがダガー投げる

フドーリン「2」

マスター「はい？」

フドーリン「2。」

マスター「不器用でつがえられない(笑)」

ファラシオン「構えて投げようとして、『あ、あああああ』

フドーリン「ととととととととって感じ？」

マスター「じゃあ、次はアマーギンだね。チャージャー！以上。」

ゴルブラス（アリオン）「(さっきのターンで準備していたことにして) 撃つよ」

しかし、魔法のかかかっていない矢だから、大したダメージを与えられなかった。

バックニア「次はしょうがないなあ・・・黒い剣は抜けないの？」

マスター「もう少し追い詰められたら抜けてもいい<sup>19</sup>」

バックニア「じゃあ仕方ないから魔法のなくなった剣で切りかかる。俺にはこれしかないんだあ！」

ダメージは大したことなかったが、痛打が飛びぬけてた。

マスター「側頭部に当たって首を吹っ飛ばした。兜がないと即死。」

バックニア「リッチだから即死もへったくれもないよなあ・・・」

ファラシオン「でも、首は吹っ飛んだよ」

マスター「拾った。」

バックニア「じゃあそれで1ターン消費ね。チャージもなくなったよ」

マスター「いやいや、首ふっ飛ばしたのではなく、首の骨が折れただけ。ルールブックには吹っ飛ばしたとしか書いてないし」

バックニア「でも、ここは演出的に首を吹っ飛ばして、「やったあ」とか思っているときに「フフフ、こんなもので死ぬと思うか」、それが怖くて格好いいんじゃない<sup>20</sup>」

フドーリン「なあ」

ゴルブラス「1ターン使うけどな(笑)」

マスター「(無視して) 怨霊なんだけど、何をするかというと・・・」

フドーリン「不思議な踊りを踊った？」

マスター「5体がバックニアにいき、5体がフドーリンにいった。(この前アマーギンを倒したのはフドーリンだしね。) ちょっと特殊な攻撃だよ。」

この怨霊はまとわりついて、行動力を下げてくる。バックニアに3体、フドーリンに2体まとわりついた

---

<sup>19</sup> ごめん。3ターン後には激しく追い詰められたはずなのに、忘れた。

<sup>20</sup> それ採用すればよかったかもね。

---

バックニア「まとわりつくな！鬱陶しい！」

マスター「まとわりつくと、1体につき行動力が-5、抵抗力が-10ね。バックニアは合計15、フドーリンは合計10。更に毎ラウンド1打撃ね。一体につき」

バックニア「こいつは引き剥がせるの？」

マスター「1体ずつね。」

バックニア「おおい、援軍はまだか。」

マスター「じゃあ、アマーギンが呪文を唱えるけど・・・いいかな」

ゴルブラス「(バックニアの事を考えず) いいよ。(笑)」

バックニア「あれ？(首を吹っ飛ばしたので) 1ターン消費したんじゃないの？」

マスター「・・・わかった。今回はそうしてやるか。次のラウンド。」

バックニア「よし、みんなイニシアチブをふれ！」

次のラウンドはまずアリオン(ゴルブラス)が弓を番えて終わる。ファラシオンは雷弾の杖に持ち換える。

マスター「では、怨霊のターンか・・・。また二人にいくか・・・？いや、全部ファラシオンにいこ！」

ファラシオン「やめろおおおおおっ！」

この結果、2匹の怨霊がファラシオンにまとわりつく。更に運が悪く、アマーギンの番になる。

マスター「召還(うれしそう)。アマーギンが手を振ると、ばらばらと3個の小石がばらまかれて、そこから3匹の骸骨戦士が現れた。」

バックニア「またお前か！」

マスター「しかも、今度はさっきと違って強そう」

ゴルブラス「じゃあ、あそこの神殿にいた5匹もこいつが仕掛けてきたのか。」

マスター「そうだね。」

バックニア「じゃあ、今度は俺の番か。ひっぺがすか。」

バックニアはクリティカルで抵抗に成功し、2匹の怨霊を引き剥がす事に成功した。

バックニア「ふんがあ！じゃあ、その剥がした怨霊をアマーギンに投げつける<sup>21</sup>」

マスター「いやあ、流石に前回一発でやられたから、今回考えたよ。気合入っているよ<sup>22</sup>」

バックニア「でも、今回直接戦っているのも俺だけだしなあ。かなり不利だよ。しかも得物もどんどん壊れていくし」

ファラシオン「ホビットが脱落したのは誤算だった・・・」

フドーリン「いや、結局アリオンが自由に使えるわけだし」

ファラシオン「ジョンドレドがいたら違ってたかもな。」

続いてフドーリンも怨霊のひっぺがしを試みる。バックニアより抵抗力が低いが同じくクリティカルで成功したためこちらも2匹を引き剥がした。

フドーリン「むん！！！」

次のラウンドに入る。フドーリン、バックニア共に引き剥がしに成功したため素早く行動できる。まずは、フドーリンが目の前の怨霊を一撃で吹き飛ばした。

---

<sup>21</sup> ごめん。そんなルールもない。

<sup>22</sup> すまん。後々分かるが、気合入れすぎた。

---

マスター「では、次亡霊（いつの間にか怨霊から変わってる）の番ね・・・（うーん、やっぱりフドーリンは強いな）よし！フドーリンに6匹！！！」

フドーリン「ええええええええ！？そんなはずはないやろ～<sup>23</sup>」

マスター「まあ、元々フドーリン封じのために用意したものだからね・・・（ロール）あ、ごめん。全部命中した(笑)。全部で行動力-30、抵抗力が-60」

ゴルブラス「それははがれねえんじゃないか？」

フドーリン「確かに、それははがれんかも。」

ゴルブラス「周りがはがそうとすると、こいつもダメージ受けるの？」

マスター「注意深く攻撃するとかでもいいよ。心霊抵抗でひっぺがしでもいいけど。」

バックニア「うーん、こりゃ全滅だなあ」

フドーリン「大丈夫、下にいるのお前だけだから(笑)」

ファラシオン「じゃあ、俺はアマーギンに向かって雷弾の杖を使います。」

虎の子の雷弾。アマーギンに18点のダメージを与え、痛打は・・・

マスター「盾を持った腕に直撃！」

バックニア「これで魔法の準備は解除だな」

マスター「うーん。まあ、その通りだな・・・」

ファラシオン「呪文は撃たせん！！」

そしてイニシアチブ的には3匹の骸骨の番

マスター「3匹ともバックニアにいったいいいかな？」

バックニア「やだ」

マスター「(無視してロール)」

2匹が命中して合計21点のダメージを与え

マスター「一発目は胸に命中して毎ラウンド打撃1、1ラウンド麻痺、2発目は武器を持った腕の腱を切り裂く」

バックニア「やったあ～、全滅だあ・・・うわ、あと10点しか（鍛錬が残っていない）」

ゴルブラス（アリオン）「お前ら、ぶっ殺してあげますわ！」

この攻撃はクリティカルヒット。アマーギンに

マスター「ドスッ！と刺さって22点のダメージ。痛打は？」

ゴルブラス「78」

マスター「面白くねえなあ！ふくらはぎの筋肉が・・・切れない、行動力も低下しない、痛がらないから麻痺もない(笑)でもって、矢はあつけなく崩れ落ちた・・・<sup>24</sup>」

---

<sup>23</sup> 多分これだろ？「大木こだま・ひびき」



<sup>24</sup> 一応、通常の武器でも攻撃は利く。すぐ武器が崩壊するだけ。

ファラシオン「ダメージ与えるけど、崩れ落ちるのね。」  
マスター「さて、アマーギンの番だが『お～の～れ～』と呪文唱えていい？ マイナスつけるから？  
いいよね？」

バッカニア「唱えたら全滅しちゃうからなあ・・・」

マスター「はい。呪文～、呪文～」

バッカニア「ファラシオンに撃っていいよ」

マスター「いや、まとめて掃除する」

フドーリン「それは怨霊も？(笑)」

ファラシオン「一網打尽だ、クリンナップ」

バッカニア「クリンナップ、クリンミセス！？(笑)<sup>25</sup>」

マスター「・・・『眠り』！」

ファラシオン「きったねえこいつ！ きったねえよ・・・<sup>26</sup>」

マスター「さてと・・・レベルの関係で二人までだな。誰にしようかな・・・？」

ファラシオン「フドーリンとヨナンボー(笑)」

マスター「アリオンにファラシオンに決まっているじゃねえか！ ダメージソースなんだから！ ほら抵抗しろ抵抗」

ファラシオン「きったねえよ！ ダイス振って決めろよダイス！(笑)<sup>27</sup>」

ファラシオンの叫びもむなしく、『眠り』が発動する。アリオンは失敗し、眠ってしまう。  
ファラシオンはロールで90以上をださないと成功しないのだが・・・

ファラシオン「出たーーーーっ！ 眠らない！(笑)眠れない、眠れない！」

マスター「・・・アリオン寝たからいいもんね。」

ファラシオン「ヨナンボー、アリオンを起こして」

マスター「きったねえ・・・」

ファラシオン「それ位やっぱりね」

ゴルブラス「俺這って起こしていくのね」

ファラシオン「僕がアリオンを起こさなくちゃ！ 僕も役に立たなくっちゃ！(笑)」

ゴルブラス「うっかり穴に落ちちゃうの(笑)」

ファラシオン「それでうっかりリッチの頭にゴオンと当たって倒すのね(笑)」

マスター「(・・・・・・・・それも面白いな。)」

ラウンドの最後、フドーリンは怨霊の引き剥がしを試みるが、抵抗力もないため 95 以上を出さないと成功しない。

ゴルブラス「アリオンを起こした後、引き剥がしに行くか。」

<sup>25</sup> もう頻繁にでてくるから紹介してやれ！「すごいよ！マサルさん」



<sup>26</sup> とりあえず悪役のすることですから、褒め言葉ですよそれは。アンデッドは寝ないからね

<sup>27</sup> まあ、今まではターゲットはよくこの方法でランダムで決めていたが、相手も知能のある敵だし。判断させてもらおう。

---

敢え無く失敗

フドーリン「俺はもう無理に引き剥がす事を考えず、無理やり攻撃するしかないなあ・・・」

このラウンドバックニアも麻痺していたため、次のラウンドになる。初手はアマーギン

マスター「アマーギンが何しよっかなあ・・・チャージ!!!」

ファラシオン「じゃあ、俺はアマーギンに雷弾。師匠と言えども容赦はせん！」

しかし、気合にダイスの目は及ばなかった。しかし、痛打は

マスター「激しく帯電・・・打撃+9、行動力-10。」

バックニア「チャージ解除～」

マスター「(行動力といってもマイナス10だしな) やあだあ！」

バックニア「なんだよ、往生際が悪いなあ」

叫び空しく、バックニアへ骸骨3匹の攻撃。1点、2点、4点のダメージ。これによって残り少ないバックニアの鍛錬は切れ、気絶する。

ファラシオン「バックニア～!!」

バックニア「やられた・・・」

続くフドーリンも引き剥がしを続けるが、これも失敗してしまう。

マスター「すると、バックニアに憑いていた亡霊を誰に移すかだな・・・」

ゴルブラス「次は俺の番だな」

ファラシオン「アリオン起こして。」

ゴルブラス「起こした。」

一方で、ファラシオンも怨霊にまとりつかれ続けているため、ダメージも累積している。正しい判断だけど。このまま全滅ムードが漂う・・・

バックニア「こんな時ジョンドレドがいるが・・・」

マスター「じゃあファラシオンに亡霊が3匹いくよ。うりゃ～、1発命中。もう一匹亡霊が増えたよ。」

次のラウンド・・・亡霊のせいでイニシアチブも低下し、イニシアチブを取ることも難しくなってくる。まずは骸骨騎士

マスター「下に誰もいないから何もしない(笑)。以上。次は？何もしないとアマーギン行動するよ」

ファラシオン「雷弾を撃ちます。おりゃあ・・・75？」

マスター「75かよ・・・はずした。というレベル」

ファラシオン「はずした！？もったいねえ～」

ゴルブラス(アリオン)「じゃあアリオンが(フドーリンのを) ひっぺがしていい？」

これで一枚ひっぺがした。

フドーリン「よっしゃあ、俺も自分でひっぺがすぜ！これでようやく90になった・・・80！」

マスター「おいしいねえ・・・アマーギン。よし、これで終わって！」

バックニア「このバランスから考えても殺す気満々だよな。」

マスター「よし、亡霊巻き添えにしてぶっ殺して終わりにしてやる！」

---

ファラシオン「巻き添えでぶっ殺して終わるシナリオっていいね(笑)」

バックニア「ヤバイヤバイ」

マスター「『冷球』を穴に撃ちます。直径 30cm の冷気の塊が術者の手から発射される。これは術者の決めた場所で爆発し、半径 6m に影響を及ぼす。」

ファラシオン「なんだと!？」

フドーリン「みんな揃って穴の近くにいるなあ。」

ファラシオン「待て!これは(ルールブックには)『術者の決めた場所で爆発し』って書いてある。こんな呪文では駄目だ!認められない!!(笑)<sup>28</sup>」

アマーギンの放った『冷球』によって一行は一斉に冷気によるダメージを受けてしまう。

マスター「じゃあまずアリオン、5点のダメージ。痛打なし」

バックニア「しょぼいな。意外と」

マスター「アリオンの敏捷が高いからな。次はゴルブラス。」

バックニア「死ぬんじゃない?」

マスター「うん。多分死ぬと思う。あああああああ〜っ!(笑)14点のダメージ。で、痛打」

ゴルブラス「やめろ、やめるんだあ!」

マスター「冷気を浴びる。打撃+3」

ゴルブラス「あと4点」

マスター「次はフドーリン。抵抗力がないから、平目+20か。あ、99が出た。」

フドーリン「99が出たあ!?亡霊もろとも吹き飛んでやる」

ファラシオン「お前が亡霊になるんだ。」

マスター「28点。そして、痛打は・・・」

フドーリン「うーん、HPが半分になった。」

マスター「下半身に当たる。凍傷になる」

全員爆笑

フドーリン「葉っぱがあああああああ!(笑)」

マスター「1ラウンド麻痺。下半身を覆っていたものはすべて破壊される。行動力-30。」

フドーリン「葉っぱが・・・亡霊はどうなったの?」

マスター「怨霊は全部散った。」

フドーリン「なんか、抵抗力が上がって嬉しいなって感じ(笑)」

マスター「よし、本命だ!ファラシオンが21点のダメージ。」

ファラシオン「は!?問答無用で死ぬなあ。残り4点」

ゴルブラス「亡霊消えた?」

マスター「もちろん消えた(痛打のロール)うわ、こりゃかわいそうだ。下げよう(笑)太股が凍って4ラウンド麻痺、行動力-30」

バックニア「結局何もできないんだな・・・さあ次。」

マスター「いや・・・もうケリはついたべ。」

ゴルブラス「アリオンがまだピンピンしている。」

ファラシオン「アリオン、この雷弾の杖を・・・あと1発だけ残っている」

マスター「いやいや、魔法使いじゃないからあまり意味がないよ。うーむ、倒しようがなかったか・・・」

---

<sup>28</sup> ルールブックの誤植によって呪文を無効化にするなんて、必死だな。



---

マスターはそろそろ、というかやっと強すぎたんじゃないかと後悔している。

ゴルブラス「じゃあ、アリオンが最後の矢を撃つよ」

ファラシオン「撃て！！！」

アリオン（ゴルブラス）の最後の矢。しかし、命中はしたが、痛打が意外と高かった。

マスター「武器を持った方の腕が折れる。・・・ただーそろそろケリつけようかなと思って。アマーギンは動きを止めた。」

アマーギン「さすがは我が弟子の一行・・・これほどまで追い詰められるとは。黒い剣を渡せ。そうすれば見逃してやろう。」

バックニア「お前の目の前に転がっているじゃねえか(笑)」

フドーリン「貴様なんぞに渡すわけにはいかないのだから！でも俺下半身凍傷(笑)」

ファラシオン「殺してから奪えやあ！」

フドーリン「お前も余計な事を言うなあ(笑)」

ファラシオン「その黒い剣をどうするつもりだ？」

アマーギン「これは我が主人の持ち物・・・」

ファラシオン「サルマンに渡すつもりか！？」

アマーギン「サルマンのようなケチな小物ではない。この剣は黒の乗り手のもの・・・お前たちは命を犠牲にしてこの私のところに黒い剣を運んでくれた。礼を言うぞ・・・」

マスター「と言ってー」

ファラシオン「礼を言うときはもう少し丁寧と言うもんだ！」

ゴルブラス「しかも、腕が折れてるじゃないか！」

ファラシオン「師匠、貴方は死霊に心を売り渡してしまったのですか！」

バックニア「そうだろ？」

ファラシオン「と言って俺の流した涙がリッチに当たるよ(笑)」

マスター「でも、上からなんだよなあ(笑)」

バックニア「マトモと一緒にいるのは俺だけなんだよな。」

マスター「じゃあ、お前が何か喋れ・・・ないんだよなあ(笑)」

ファラシオン「じゃあ、上がってくれば？リッチなんだから」

マスター「じゃあ上がっていき。フワーってあがって。」

アマーギン「せめて、この黒い剣で貴様らに止めを刺してやろう。」

ファラシオン「(そろそろ麻痺取れた?)」

マスター「取れてるよ」

フドーリン「そろそろ凍傷治った？」

マスター「凍傷はなおんねえ。30秒で直るかい！(笑)」

バックニア「さて・・・どうするんだよ。」

マスター「・・・ファラシオンを殺すために黒い剣を振り上げた」

フドーリン「させるかあ！・・・(ダイスを振る)」

マスター「よし。それOK」

凍傷になりながらも必死にフドーリンはアマーギンにタックルする。

マスター「ところがだ、今接触したべ。それがまずいんだよなあ。君は恐ろしく冷たい冷気に襲われる。気が遠くなる。」

バックニア「今だ。熊になるんだ。」

マスター「意識はまだかろうじて残っているから熊にはならない。」  
アマーギン「無駄だ。」  
マスター「えーっと、どうしようかな。決めた！アリオンはどうする？」  
ゴルブラス（アリオン）「弓とか撃っちゃっていいの？」  
マスター「それではさすがにどうにもならないだろう・・・」  
フドーリン「俺はもう生きてる心地がしないよ」  
バックニア「俺はもう気絶している」  
ファラシオン「俺も地べたに這いつくばっているから。意識朦朧としてるし」  
マスター「さて、アリオンも同じようにアマーギンに向かったが、フドーリンと同じ黒い息を浴び、崩れ落ちた。」  
ファラシオン「アリオーン！」  
マスター「ところがだー」  
バックニア「なんか、アマーギンが非常に困っているように見えるんだが」  
マスター「中の人困ってる(笑)」  
バックニア「これ以上状況が悪化しないように(笑)」  
ファラシオン「だーって強いんだもん」  
マスター「わかっている。わかっている。ちゃんと收拾をつける。ところが、アリオンが崩れ落ちると下の部屋からまばゆい光が差し、アマーギンを射抜く！暖かい光が満ち、黒い息の効果はチャラになった。」  
フドーリン「凍傷は治った？」  
マスター「凍傷は治らない(笑)そうすると、アリオンは倒れたのだが、光の柱が下の部屋の更に下から光の柱が上り、その中から一本の白い剣が現れた。」  
アマーギン「こんな所にあったのか・・・エステル・シリブレン！！！！」  
バックニア「エステル・・・シルブブレ?(笑)」  
マスター「生きてる人ー（何人かが手を挙げる）この剣取って。」

この時、示し合わせたようにゴルブラスに白羽の矢が立つ！！

ゴルブラス「俺、こうやって、うおおおおって、取るよ」  
マスター「すると、女性の声で「それで、突き刺すのです」と聞こえた」  
ゴルブラス「ズルズル・・・うあああとか、くたばれ！アマーギン！！」  
ファラシオン「じゃあ、アマーギンに食い付こう！最後の雷弾の杖をくろうがよい！」  
マスター「アマーギンは、その雷弾の杖に怯んだ。その間に後ろから」  
ゴルブラス「ブスウ！くらえええええええ」  
マスター「断末魔と共にアマーギンは崩れ去った。そして、ゴルブラスも気が遠くなった・・・」

## 第9章 エステル・シリブレンって発音しにくいなあ

マスター「すると、光がまばゆくなり、気がつくとき全員別の部屋にいた。（もう仕方ないので）傷は全て回復！チャラ！失った鍛錬は1まで回復。出血が全て直り、剣も直る」  
バックニア「おお、傷が治っているぞ」  
ファラシオン「俺たちはどうなったんだ！？」  
ゴルブラス「筋力が昔よりアップしている(笑)」  
マスター「それはないそれはない。アリオンが真ん中にいるのだが、元気な君たちとは対照的にアリオンは激しく消耗している。」  
バックニア「アリオン！どうしたというんだ、一体！？」

---

フドーリン「こんな使い捨てキャラだったのかお前は？(笑)」  
マスター「ま、まあ近い(笑)」  
ファラシオン「あ、アリオー——ーン！」  
ゴルブラス「アリオンの生命力をもらったということか！？」  
アリオン「もう私の命は尽きます。残った生命力を貴方たちに分け与えました。」  
バックニア「何で・・・そんな事を！」  
アリオン「私はここで死ぬ運命にあったのです。何故ならば、この白い剣エステル・シリブレンはエルフの命を使って輝くのです。」  
ファラシオン「そうなったら俺が死んでもいいんじゃないか？」  
バックニア「そうだ！(笑)」  
アリオン「貴方はだめです(棒読み)とか言えばいいかな(笑)。私じゃなければいけないのです。エルフの巫女でなければ・・・」  
ファラシオン「貴方が巫女だったのか・・・貴方の命、無駄にはせん」  
アリオン「この白い剣で『楔』を斬って下さい。中つ国をお願いします。」  
バックニア「アリオー——ーン！」  
フドーリン「おおおおおん」  
マスター「そう言うと、アリオンは事切れた。」

ファラシオン「じゃあ、アリオンを手厚く葬るよ。」  
ゴルブラス「上に葬るほうがいいんじゃない？」  
バックニア「黒い剣もなくなっちゃったしー」  
マスター「黒い剣は残ってるよ。まあもう面倒なのでこの部屋を調べてみると、何枚かの壁画があり、黒い剣と白い剣の情報が手に入るよ。ついでに上へ昇る階段もあった。」  
バックニア「おねがいしまーす」  
マスター「元々、この黒い剣は遥か昔に作られたものでエルフの血を吸うことでより輝きを増す邪悪な剣だった。」  
ファラシオン「名前は何と言うの？」  
マスター「決めていない。銘は失われている。」  
バックニア「名も無き黒い剣」  
マスター「あるエルフがこれを次元に封じ込めたんだけど、別の名も無きエルフがいつか復活することを予見し、この白い剣—エステル・シリブレン—エルフ語で『希望の白銀』という意味なんだけど、これを作った。しかし、どちらの剣もエルフの命を使わなければいけないということで、禍々しいとされてエルフの歴史からは抹消されている。」  
バックニア「なぜサウロンがこれを追うの？実際にどういう力を持っているの？」  
フドーリン「何故作られたかもわからない？」  
マスター「それについては壁画に書かれていない。まだ謎。」  
ファラシオン「このエステル・シリブレンを使ったら無くなるのか？この中にアリオンは生きている。でも使うといなくなるけど(笑)」

マスター「えーと、君らが上に戻ると、木の髭がおろおろしている」  
バックニア「どうした木の髭？」  
木の髭「同胞が楔に縛られているんだよ、呼んでも応えてくれないんだ・・・」  
ファラシオン「安心してくれ、木の髭。解き放つ方法を見つけてきた。」  
木の髭「おおおおおおお、それはありがたい。」  
フドーリン「その代償はデカかったがな。」

---

ゴルブラス「アリオンの勇気をかけて！」  
木の髭「エント達は集会を開かねばならないのだ～」  
ファラシオン「その集会は急ぎなんだな？」  
木の髭「いそぎ？」  
ファラシオン「急いでないな(笑)この小さい人が楔からこの剣で解き放ってくれる。」  
ゴルブラス「俺の役目か？よみがえれ～！ジャキンって」  
マスター「鋭い音と共に楔は千切れ、そこかしこでエントが蘇る声が聞こえたような気がする。」  
ゴルブラス「エントが解き放たれた！ありがとう、アリオン！」  
バックニア「そしたら、白い剣の光が弱まってきた感じがする(笑)」  
マスター「それはないない。ただ、アリオンが笑ったような気がした<sup>29</sup>。」

地獄の底から甦ったアマーギンを倒し、文字通り『希望』を表す剣を手に入れた一行。アリオンという尊い命を犠牲にして得た、この剣がこれから始まる闇の軍勢との凄惨を極める戦いの中でこの剣が希望の光を放つのはそう遠くない未来であろう……

---

<sup>29</sup> 気がついたか、これ『うしおととら』ね。そういえば、トンネルの怪物もそうです。

---

---

## 次回予告

闇の勢力との戦いがついに口火を切る。

オークによって壊滅したメル村の民を引き連れて一行はローハンへ向かう。それは、闇によって急激に光がその輝きを失うことを意味していた。

そして、ついに光と闇の力は角笛城で激突する！

光の勢力 500、闇の勢力 10000！

この圧倒的な力の差を前にして、一行は再会したジョンドレドと共に  
にもはや後のない、絶望的な戦いに身を投じる

絶望に包まれた角笛城に希望の白銀は輝き、太古の熊が咆哮する！

そして夜明けと共に・・・

ACRAP 提供 LOTRRPG

第4回『角笛城の白銀』！

乞うご期待！

---

---

## シナリオ作成メモ

ふう。回を増すごとに分量が増し、收拾がつかなくなってくるのは作家なら誰でもある現象かと思いますが、今回も録音ミスがなければもれなく最高記録更新だったところです。むしろ録音ミスが痛い・・・ってことでシナリオ作成メモのコーナーです。パチパチ

第1回は野外アドベンチャー、第2回がバトル&潜入ミッションだったので今回はダンジョンにしようと言うのはずっと前から暖めていた構想です。ちなみに、黒い剣と対を為す白い剣というのも元々の構想。ただ、エルフとの関係については思いついたものですが。ダンジョンと言ってもウィザードリィじゃないんだから、ダンジョンに潜る必然性がなければいけません。そこで白い剣だったのですが、当初はエントの楔の方がメインでした。

だってさ、『二つの塔』でき、いくらエントが太古の種族とは言っても大魔法使いサルマンをあんなにあっさり攻め滅ぼすっておかしいじゃん。サルマンも抵抗らしい事なにもしていないし。ってのが元々疑問があったので、このシナリオではサルマンは既にエント対策を（『楔』）していた事にして、それが解き放たれたからあのようになった、という（自分）説明をつけるつもりでした。

順番前後しちゃったけど、『旅の仲間』のシーンのオマージュも今回は入れました。やっぱり、LOTRのオマージュなんですから一回位はナズグルに遭遇して恐怖に打ち震えてもらわないとってところです。まあフロドのように致命傷は負わせませんでした。

そうそう、フロドと言えはこのシナリオからホビットのゴルブラスが登場しました。まあ、余り予測のつき難い、かつ荒唐無稽なロールプレイだったけど、シメるところはシメてくれたので結果的にはLOTRらしくなり、ゴルブラスのプレイヤーには感謝するべきでしょう。

だからって投げるなよというツッコミが入るところで中盤の悲劇2重落とし穴。大人だから引っかかりさせるために罠を工夫するのは楽しいですし、何となく思いついただけのトラップなのでもちろんPCに回避の余地はいくらでもあったんですが、最も笑える形で引っかかりしてくれたのはやはりACRAP天然の素質があったからでしょう。

でも、マスターとしてやり過ぎちゃったのはやっぱりアマーギン。やっぱりルールを決められる分本気出すとマスターの方が強いんだねということを再確認しました。もう明らかに中の人困りました。まあ、実はもう少しで死にそうだったんだけどね。とはいえ、地の利も非常に不自然だったし、展開にも無理があったのでこれはちょっと反省しています。でも、戦術的には優れていたと思うんだけどな・・・

あとは遂にガンダルフを出してしまった事。前回ガラドリエルを出してしまったのもアレですが、やっぱり偉大な魔法使いというイメージを壊さずにロールプレイするのは難しい。しかし、賢者が故に話の牽引役を任せられる。脚本的には便利だが演出は難しいと言うジレンマ。以降もガンダルフを出す度にこのジレンマには陥るでしょう。次角笛城だしね。出すんかい。うん、楽だし

さて、次は今までとは毛色を変えて、オマージュどころか映画そのままの展開になります。『二つの塔』のクライマックスである角笛城を舞台としてストーリーが進んでいきますよ。ってことで次回お楽しみに！